

なお、笹に漢字名の篠^①を当てなくてはならないなどと主張する学者があるが、もともと日中両国で、それぞれ違った植物に対してつけられた名で、和産のササに、漢名の篠を結びつけることの方が、余程、不自然な、非科学的なことである。

我々の祖先は竹と笹をどうして区別して命名したかという点、稗を利用しては○○ダケ、葉を食器とか觀賞用などに用いたものには○○ササと命名した。例えば竹として稗を利用したものではマダケ、ハチク、ヤダケ、スズダケ、カンチク、ネマガリダケ、シノダケ、ゴキダケなどで、笹と呼んだものにはクマササ、チマキササ、ネササ、オカメササなどである。

しかし学問的には、竹と笹の区別は、タケノコが筍の成長後に落ちるか、あるいは永久に着けているかということで、前者を竹といい、後者を笹と呼ぶことを私が提唱した。上記の種類で竹の類にはマダケ、ハチクでヤダケ、スズダケ、カンチク、ネマガリダケ、シノダケ、ゴキダケなどはクマササ、チマキササなどとともには笹のグループである。また、オカメササは上

のような見解から1mに足らぬ小型であるが竹の1種である。

バンブーの語は東南アジアの植物が産んだ言葉である。マレー半島などの竹類は地下茎の先端が上向して稗となる。それ故、稗は肉が特に厚く、簇生する。この多数の稗が大火にあると節間の空気が膨張して、厚い材を裂き、熱せられた空気が裂け目から吹き出るのである。この音を聴くと、大きくバンブー、バンブーときこえるのである。同時に熱い空気が吹き出るのである。それで遂に、マレー地方の土人がその音からバンブー Bambu といひ出したといわれる。

その後、東西の交通がさかんになるにつれてバンブーの稗と名称が西洋各国に伝わり、同一発音バンブーを語幹として転化したと思われるのである。すなわち、インド語では Mambu (= Bambu)、スペイン語では Bambú、ポルトガル語では Bambú、英語では Bamboo、ドイツ語では Bambus、フランス語では Bambou、ソ聯語では Bambuk、イタリア語では Bambú、オランダ語では Bamboes、ラテン語では Bambusa と語尾が変化している。

① 武田久吉、民族と植物、144ページ、(昭和22年)

新刊紹介

六甲山系植物誌

神戸市農政局編

本書は神戸市の委嘱によつて京都大学農学部岡本省吾先生が昭和11年から25年まで四季に亘つて採集調査されたもので、六甲山を中心として神戸市の海浜から、東は武庫川、西は明石川、北は丹上山、帝釈山、千刈までの間の自生、または栽培品を含むシダ植物以上の調査報告書である。

調査記録した植物は159科、651属1200種、214変種、35品種である。この植物種類数は本県所産の殆んど大部分を占めている。我々の最もよきことばしいことは各科名の次に属の検索表があり、続いて種類の検索表が付けてある。検索表には専門書と違い、莖葉の形態に重きを置いているので一目で種類を決定することが出来る。また種類の次には実に要領を得た説明も記載されていることである。それ故、どんな初心者でも自由に、本書に基づいて種類を決定することが出来る

ことである。また、牧野富太郎先生などの植物図鑑は主として関東辺のものと、関西の普通種とであるが、本書と図鑑が揃うと誰でも容易に種類を決定出来ることである。それ故、単に神戸住人だけでなく、関西の方なら大いに利用して戴くことの出来る好著である。

なお、口絵は美しい64枚の写真と附属には学名、和名の丁寧な索引が付けてある。

出版は神戸市農政局で非売品として出版されたものであるが、特に篤志家のために50部が市販されたから、希望の方は至急注文されることを御薦めする。

B5版、145ページ、上質紙使用、写真64枚、本製本、定価1,000円、送料50円、昭和30年8月31日発行、

発行所、大阪市大淀区中津本通2丁目104、六月社
(室井 綽)